

豊かな湧水のもとに生まれた人と自然の関わり・共生

くまもとの水田稲作の拠点 (旧石器～弥生時代)

江津湖一帯では、豊かな水資源を求めて古くから人が住みつき、多くの遺跡が残されています。

発掘調査では、旧石器時代（約2万年前）の槍に使用された石器や、弥生時代始めごろの米粒の跡が残った土器も見つかっています。



(水前寺江津湖遺跡群)



(土器（弥生時代）)

肥後国の中心地として発展（奈良時代）

奈良時代、聖武天皇は仏教による国家鎮護のため、日本の各国に国分寺と国分尼寺を建立するように詔勅を発します。

- ※「国分寺建立の詔」抜粋
七重塔を持つ寺（国分寺）は「国の華」であり、必ず良い場所を選定し、いつまでも長く久しく続くようにしなさい。

この国分寺が現在の出水小学校付近に設置され、国分尼寺が体育館跡地東側付近に設置されています。

江津湖の形成（江戸時代）

1588年、27歳にして肥後北半国の領主となった加藤清正は、熊本城の築城とともに、河川の治水事業や新田開発に精力的に取り組んでいます。当時、氾濫で悩むこの地域に堤防を築き（江津塘）、西側一帯に新田地帯をつくりあげたとされています。

この築堤により、現在の江津湖が形成されました。



(江津塘)



(上江津地区)

藩主の別荘地（江戸～明治）

江戸期、熊本藩初代藩主である細川忠利は、この地に御茶屋を設け、3代綱利の時代には、御茶屋を拡張して水前寺成趣園を整備するなど、豊かな湧水は歴代藩主にとっての休息の場となりました。さらに、明治期には旧細川砂取邸も整備されるなど、一門や有力家臣の別邸の場にもなっていました。

舟運による物資輸送拠点（川の副都心）（江戸～明治）

加勢川を使って内陸部へアクセス（舟運）できる交通上の要衝として発展していました。米の積み出しや穀物の輸送などが行われていました。

産業の拠点（江戸後期～明治～大正）

江戸後期（1803年）に、豊富な湧水を利用して現在の体育館跡地一帯に蠶糸所が設置されます。（水車を湧水でまわし、動力でハゼの実を粉にしていた）

明治に入ると、豊富な地下水とサツマイモからアルコールをつくる肥後酒精(株)を設置するなど、水前寺には「酒精」「精蠶」の2大工場が立地し、産業の拠点として発展していました。

『熊本における近代産業の発展』 ⇄ “江津湖の環境問題のはじまり”

自然と人間社会との調和のとれた営み（明治～昭和初期）

あちこちに洗い場が設けられ、夏は子供たちの遊び場。冬の寒い日には、水の温かさを求めて、米を研ぎ野菜を洗う人々で賑わう。豊かな漁場、肥料となる川藻の採集、川舟による物資の輸送など幅広く生活に密着していた。（江津湖研究会資料）

お百姓さんは、藻取り舟を持っていて、泥藻取りも農家の仕事で、すべて田んぼの栄養になるんですって。これが浚渫にもなっていたのですね。（中村汀女・水郷画図の歴史）

江津湖に関わる文化人



(夏目漱石)
※五高教授時代

夏目漱石（1867～1916）

1896年、旧制第五高等学校（現熊本大学）の英語教師として熊本に赴任し、1896年から1900年までの約4か月を熊本で過ごしています。

熊本での赴任中は、五高短艇部の部長として江津湖をたびたび訪れており、「すこぶる気に入った」と表現しています。

藻ある底に魚の影さす秋の水



(徳富蘆花)

徳富蘆花（1868～1927）

熊本県水俣市生まれ
1913年、夫人と旅をした際に熊本に滞在した際、砂取橋あたりの水の流れの美しさを絶賛しています。
しかしながら、1907年に創業していた酒精会社の排水による江津湖の汚染について、次のように表現しています。

折角の興を打破られて、のろましい気分になる



(中村汀女)

中村汀女（1900～1988）

熊本市江津湖畔に生まれる。
ふるさとの江津湖をこよなく愛し、江津湖にちなむ句を残しています。

※句集の自序
朝夕、湖を見て育った。走る魚の影も水底の石の色も皆そらんじている。その江津湖畔に私の句想はいつも馳せていく。

とどまれば あたりにふゆる 蜻蛉かな

急激な都市化

昭和に入り、江津湖周辺は新興住宅地として発展していきます。昭和40～50年代には、東部地区の飛躍的発展により、江津湖の水質はさらに悪化していきます。

また、度重なる水害による泥土の堆積やヘドロの堆積も重なり、この時代江津湖は荒廃していきました。

環境改善への取り組み

昭和期は、江津湖の沼地化を阻止するための戦いの時期でもありました。また、昭和40年代には激しく汚濁化が進み、江津湖は瀕死の状態となっていました。

悪化していた水質は、流域の公共下水道の整備により大きく改善が図られ、さらには研究者による再生への取り組みとともに市民による江津湖の自然を守るための取り組みにより、江津湖の環境は改善してきています。

20015 江津湖地域における特定外来生物等による生態系等に係る被害の防止に関する条例
20008 平成の名水百選に選定
20002 日本の重要湿地500に選定

19995 上江津湖の浚渫
19994 上江津湖の浚渫
19993 上江津湖の浚渫
19992 上江津湖の浚渫 ※自然カット方式

1973 下江津湖の浚渫開始（1986）
※一律カット方式
※当時、大繁殖したタイワンナギが繁殖しにくい水深とするため
よどみ・新たな湖内汚染

1969 鳥獣保護区に指定
1966 成趣園の管理を出水神社へ返還する
1965 上江津湖の浚渫 ↓ 中の島を造成

江津湖の荒廃（昭和40年代）

1955 網締所（肥後精蠶）が廃業
1953 6・26水害
1945 熊本大空襲（一面焼け野原）

1930 風致地区に指定
1929 成趣園が国の名勝および史跡に指定される
成趣園東側に動物園が開園

動物園（成趣園東）

1925 市が出水神社から成趣園を借り受ける
1924 市電が成趣園入口まで開通・上水道・都市ガス
1924 水前寺ノリ 国の天然記念物に指定
1913 徳富蘆花 三か月におよぶ旅行
1912 古今伝授の間が京都から移築復元

肥後酒清(株)が創業

1907 夏目漱石が見熊本大学の英語教師として赴任（1900）※五高短艇部部长
1896 夏目漱石
1878 出水神社が創建 ※前年まで西南戦争
出水神社

1842 網締所が櫛方に統合（藩の専売品）
1803 網締所が水前寺に設けられる

1752 細川重賢の「宝暦の改革」
↓ 厳しい藩の財政
1670 細川綱利の命により、御茶屋の普請が始まる（水前寺成趣園）

1665 水前寺成趣園
1636 水前寺が廃寺となり、御茶屋は藩有となる
1632 国府に御茶屋が設けられる
江津塘の築造 ↓ 江津湖の形成
肥後国家一揆（佐々成政の失政） ↓ 加藤・小西が鎮圧
名前の由来

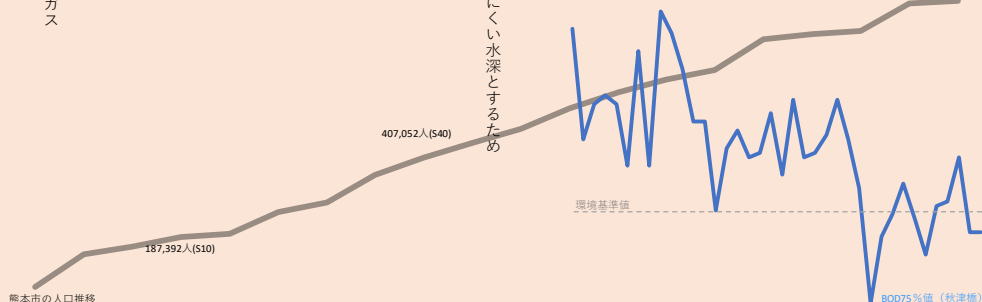
1588 加藤清正 隈本城に入る
肥後国家一揆（佐々成政の失政） ↓ 加藤・小西が鎮圧

約1300 国分寺・国分尼寺
約800 官庁街

約2800 大集落（上江津）、稲作、古墳（下江津）（江津湖遺跡群）
約1300 熊本の水田稲作の拠点

約1600 堅穴住居（上ノ原遺跡）
約2800 広大な湧水地帯

約20000 槍を使用して、動物を捕獲したりしていた。（江津湖遺跡群）



環境意識の高まり

戦後の急激な都市化

新興住宅地

発展の基礎

藩主の別荘地
産業・流通の拠点（酒精、精蠶）

くまもとの中心地（大都会）

くまもと稲作文化のはじまり

マイクロプラスチック
2018 江津湖の底にプラスチックの微粒子（マイクロプラスチック）が蓄積
※最大2091個（熊本大学調査）

ウォーターレタス

熱帯・亜熱帯域で生息するウォーターレタスが1996年ごろから江津湖でみられるようになり、毎年大量繁殖

早期浚渫の提言

1990 水問題推進懇談会（諮問機関）
上江津 平均水深1.5 m
下江津 平均水深1.5 m以下
中之島の除去

トンボ21種
※30年前から半減

まるでクラウン

1988 江津湖の水位低下
タイワンナギの大繁殖
1972 下江津だけで5万羽
↓ 自衛隊の清掃作戦 ↓ 再繁殖

カモの急増による食害

1969 鳥獣保護区への指定
飛来するカモの急増 周辺農作物の食害

6・26水害

1953 6・26水害発生
↓ 湖の中央にアンが生える
↓ 周辺の水田は伏流水のため浸田化
↓ 浚渫は全市民の願い

画図湖の深刻な汚染

1932 「画図湖期成会」
湖水は濁り、水深は浅く、市の発展は東部に向かって急速に進出
下水はほとんど全部が画図湖に打ち出されている。

大正末までは、まだまだ水量も豊富で、毎日いくつもの養殖船が湖面に浮かび、清れつな水に育った魚類が食卓に上る（清水正元）
大正初期までは、下江津湖で水前寺ノリが生育（江津湖研究会）

都市問題（明治末・大正初期）

① 軽便鉄道のばい煙
② 江津湖の汚染
（酒精会社の排水）



（中村汀女）



（徳富蘆花）



（夏目漱石）

細川綱利

- 第3代熊本藩主
- 水前寺成趣園の工事

細川忠利

- 肥後熊本藩初代藩主
- 細川ガラシャの三男
- 徳川家への熱い忠誠心
- 晩年の宮本武蔵を招く

加藤清正

- 治山治水工事・水田開発
- 江津塘をつくる

ふるい寄せて白鳥崩れん許なり

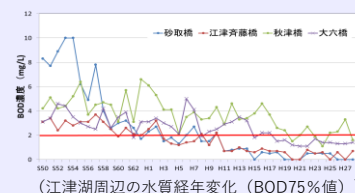
水前寺江津湖公園の抱える課題

水環境の保全（湧水量の減少とゴミの堆積などによる湖の汚染）

湧水量は回復の兆しが見られるものの、長期的に見ると減少しており、昭和35年頃には、約90万 m^3 /日あったとされる湧水量も、現在では40万 m^3 /日まで減っている。水質は、公共下水道の整備により大きく改善されているものの、流入河川などからのゴミの堆積やマイクロプラスチックによる汚染など、水環境の保全に関わる課題を抱えている。



（江津湖湧水量の推移）



（江津湖周辺の水質経年変化（BOD75%値））



（流入河川からのゴミの堆積）



外来生物の繁殖（本来の自然環境の喪失）

江津湖の恵まれた湧水により、様々な植物・昆虫・鳥類・魚貝類等が調和し、豊かな自然環境を創り出してきた。しかしながら近年では、オオクチバスやボタウキクサなどの外来生物の繁殖により、本来の自然環境が変化し、生物多様性が損なわれつつある。



（ブルーギル）



（カダヤシ）



（オオクチバス）



（ボタウキクサ）

貴重な歴史文化資源の顕在化（埋もれている地域資源）

湧水を活かし優れた庭園景観を有する水前寺成趣園などの大名庭園群や、明治の文豪夏目漱石がボート部の部長として足を運び、この地の自然を詠んだ俳句をつくるなど、清れつな湧水が多くの人を惹きつけ、江津湖には、多くの歴史文化資源が存在する。この貴重な歴史文化資源を活用、継承していくための環境整備が必要である。



（水前寺成趣園）



（旧細川砂取邸）



（漱石の句碑）



公園価値の創造（魅力の発掘発信→担い手）

これまでの公園行政は「公園を守る」という視点に重点を置いてきたことから、必ずしも市民のニーズを満たしてきたとは言えず、江津湖への関心も薄れつつある。江津湖のポテンシャルである豊かな自然環境とともに、これまで培われてきた歴史・文化を活かし、公園魅力の価値を高めていく必要がある。



<魅力発信につながる行儀事の開催>

熊本市では、水前寺江津湖公園の魅力発信につながる行儀事として、2020年秋のアジア・太平洋水サミット、2022年春の全国都市緑化フェアの開催を控えている。
→水前寺江津湖公園の「魅力」をあらためて見つめ直す絶好の契機であり、その魅力・価値に磨きをかけ、国内外に広く発信していかなければならない。

動植物園と水前寺江津湖公園の有機的な連携と一体的活用

動植物園と水前寺江津湖公園は、隣接しているものの一体性に乏しく、ポテンシャルを十分に活かし切れていない状況にある。一体的な「整備」「利用」「管理（マネジメント）」による新たな価値を生み出していく必要がある。



（動植物園の老朽化した施設）



（動植物園と江津湖の分断）
※写真：植物園→江津湖

パークマネジメント

厳しい財政状況の中、多くの公園で施設の老朽化が進んでいる。水前寺江津湖公園も同様であり、120haを超える広大な敷地に多くの公園施設が点在しており、適正な更新が必要になっている。
→効率的・効果的な公園の運営・維持管理手法（パークマネジメント）の検討を進めていく必要がある。



（老朽化したベンチ）



（老朽化した看板）



（老朽化した照明灯）

<民間との連携の加速>

既存ストックとしての公園の再生・活性化の推進のための法改正が実施される（2017.6）。
「量を整備するステージ」から「公園の多機能性を最大限に発揮するステージ」へ展開させる。
→Park-PFI（パークPFI）制度の創設

<多様な主体の参画による公園づくり>

市民、地域団体、関連団体、事業者など、多様な主体の参画による公園づくりにより、公園利用幅の拡大とともに、新たな担い手の発掘・育成につなげていく必要がある。

失われつつある風俗習慣・文化

岸辺のヨシは“よしず”の材料になり、藻は畑の肥料となっていた。江戸時代から明治にかけての自然と人の関わり・生業は、環境の維持、バランス保持につながっていた。
その暮らしと環境の中で引き継がれてきた水前寺ノリや水前寺もやしも失われつつある。

基本理念

～自然と人との共生による持続可能性の継承～

江津湖は、託麻原台地の縁辺部に位置し、約27万年～9万年前までに阿蘇の4回の大噴火により形成された水循環のしくみによって、阿蘇・白川流域に降った雨が地下水となり湧出しています。

この豊富な湧水によって、旧石器時代（約2万年前）から、人の生活の証が見つかっており、弥生時代（2800年～1300年前）ははじめのころの米粒が残った土器が出土されるなど、熊本の水田稲作の拠点であったと考えられています。さらに、奈良平安時代には、国分寺などの行政の要となる施設が置かれるなど、熊本の中心地として栄えていました。

1588年隈本城に入った加藤清正は、治山治水、水田開発に力を入れ、これまで広大な湿地帯であったこの地を江津塘と呼ばれる堤防によって制御したといわれています。この江津塘の築造により江津湖が形成され、さらに自然と人との関わりが深まっていくことになります。

江戸期、肥後熊本藩初代藩主である細川忠利は、この地に御茶屋を設け、3代綱利の時代には、現在の水前寺成趣園が整備されるなど、この豊かな湧水は歴代藩主にとっての休息の場となっていました。

明治に入り、この湧水は多くの文人墨客も惹きつけ、1896年熊本に赴任した夏目漱石は、江津湖に足を運び、この地の自然を詠んだ俳句を多く作っています。

大正時代から昭和初期頃までの江津湖は、水が清らかで澄み、多種多様な動植物が生息し、多くの子ども達が集い遊び、洗い場で野菜を洗ったり、周辺田畑の肥料となる藻刈りや、漁業が行われるなど、自然と人との生活・生業が深く結びついていました。

一方で、この時代から、湧水を活かした酒精、精蠶といった本市の近代産業の発展を担う大工場が立地するなど、都市問題による江津湖の汚染の始まりでもあります。

昭和に入ると、度重なる大洪水による泥土の堆積、急激な都市化による水質の悪化などにより、さらに江津湖は荒廃していきました。そのため、下水道の整備や浚せつなどの取組みとともに専門家による研究、市民による様々な取り組みが行われ、江津湖の環境は改善されつつあります。

しかしながら、未だ自然と人の営みのバランスは崩れ、本来の自然環境を取り戻すまでには至っておらず、ゴミの堆積などに伴うマイクロプラスチックの問題や外来生物の繁殖、さらには、江津湖の保全活動を担う人材の確保やこれまで培われてきた風習の風化など、様々な課題が山積しています。

江津湖は、先人たちが大切に育み、そして引き継がれてきた、豊かな水と緑を象徴する“くまもと”のシンボルです。

私たちは、江津湖の持つ価値をあらためて見つめなおし、過去の教訓から学び、今日の直面する課題を解決していくとともに、自然と人との共生による持続可能性を見出し、この貴重な財産を次の世代に引き継いでいかなければなりません。

水前寺江津湖公園の直面する課題に対して、“自然と人との共生における持続可能性”の観点から、あらためて事業計画を見直し検討する。※図中は意見は、現段階の協議会・部会での意見



【計画期間】

2020～2029年度までの10年間

- 2020年度を初年度として、概ね20年後の目指す姿を念頭に、ステージ毎の事業計画を策定

stage1：～2021年度（全国都市緑化フェア）、stage2：2022～2029年度

※ stage2以降は、stage2段階の進捗状況等を踏まえ検討

